

ドイツ啓蒙主義期の音楽理論家であるヨハン・マッテゾン Johann Mattheson (1681-1764) は、著書『オーケストラ研究 Das Forschende Orchestre』(1721) の中で、理性に対する感覚の優位を主張している。マッテゾンはあらゆる思考に感覚的経験が先立つと主張し、その論拠をアリストテレス主義に属す思想家たちの言説に求めている。だがその認識を決定的に特徴付けているのは、イギリス経験主義を代表するジョン・ロック John Locke(1632-1704)の『人間悟性論 An Essay Concerning Human Understanding』(1689)からの影響であろう。本発表では、ロックの認識論受容を背景に、マッテゾンの音楽論の中で理性と感覚が如何なる働きを担い得ていたかを明らかにすることを旨とする。

マッテゾンは音楽にとって感覚経験を何よりも重要視し、音楽の主体を「数」として捉える当時主流の音楽観を否定する。従来の研究では、このようなマッテゾンの態度に、所謂タブラ＝ラサ（生得的観念を否定し、感覚経験は必ず理性に先立つものとする）を掲げるロックからの直接的な影響が指摘されてきた。事実、マッテゾンは『人間悟性論』における認識論の枠組みを積極的に導入し、知覚や感覚、理性を規定していく。しかし特に理性に関する記述には、感官による感覚的知覚を直接介さない認識を音楽論から排除しようとするマッテゾンの意図を読み取る事ができる。つまりマッテゾンは、感情の惹起という音楽の目的に照らし、音楽の聴取体験や感情の知覚に適した認識論のみを取捨選択してロックの思想を受容しているのである。

以上が明らかにされるならば、マッテゾンが如何にして音楽を「感性的芸術」として位置づけ、「感覚」の担い得る働きを論理的に保証しようとしていたかを解明することが可能になる。これによって、ドイツ啓蒙主義の萌芽期においてマッテゾンの音楽論が担う意義を捉え直すことができるだろう。